

パラダイス

静岡理科大学
理工学部物質生命科学科
及び同大学院 教授

小林 久理真



「素心」を辞書で引くと「平常心」あるいは「日常の想い」のこととある。最近、いつも想いを寄せているわけではないが、静かな時間になると、ときどき思い出す映画がある。イタリア映画で、原題は「Paradiso」、訳すと「パラダイス」のことで、本当の題名と、日本で上映された時の題名は、もう少し説明的な長いものであったように思う。最近も、テレビ（BS）で放映されたが、ご覧ではない方々のために、あらすじを紹介しよう。

イタリアの田舎町に小さな映画館（教会でもある建物）があり、そこに映写技師の老人と、かれと仲良しの少年がいた。少年の父親が戦死した時など、技師と少年の間には、いろいろと思い出になるような交流があり、少年は映写技師の真似事をするようになる。結局、映写機が燃える事故が発生して、老人は傷を負い、仕事をやめる。技師の勤めもあって、少年はローマに出て、やがて映画監督となり、忙しく働く都会人に成長する。交流はとだえていたが、老人が亡くなり、その葬儀で故郷の町を訪れた少年（すでに中年、初老になっている）に、母親から技師の形見のフィルムが渡される。かれはそれをローマに持ち帰り、修復して映写してみる。すると、いろいろな映画から抜粋されたキスシーンだけが、次々と映し出される。少年の頃には、かの国でもキスシーンは（教会で上映されることもあり）公序良俗に反すると見なされ、老人技師は少年に命じて、キスシーンだけをフィルムから切り取らせていたので、後で、自分でつなぎ合わせたのであろう。きっと、かれはそれらのシーンをつなぎ合わせて、少年にいつか手渡そうと保存していたので

あろう。

大人となった少年は、一人、そのフィルムを見始めるが、やがてかれの目には涙があふれる。それらの次々現れるキスシーンが本当に美しく、愛し合う男女の気持ちが、画面からあふれ出すように見えるのである。切り取られた、当時の公序良俗に反するはずの場面に、逆に、その時代の人々の心の、もっとも深いところにあったものが写し出されていたのである。そして、老人技師の一番大切な想いも込められていたのである。

以上の長い説明までして、私がこの映画をご紹介したかったのは、この映画は、多くの大切なことを私に教えてくれたからである。第一に、本当に大切なことは人から人に直接的に伝わる、ということである。この映画の老映写技師の映画に対する愛情が、この映画監督を育てたのである。次に、大切なこと、すばらしいことは時代によっては公序良俗に反すると見なされることもある、ということである。つまり、本当に大切なものは、それを大切に目撃力のある人々が守り通すことで（もちろん、偶然のような必然もある）、保存されるのである。さらに、大切で本当に重要なものは人を感動させる、ということである。この映画のキスシーンだけが次々と映し出される部分は、本当に美しい。うっとりして、映画の中の映画監督と一緒に、思わず泣き出してしまうほど美しい。

さて、磁石や磁性の研究である。その研究の本当に大切なところは、やはり先生や先輩が若い人々に直接伝えて行かなくては、伝わらない。そうして伝わるものが若

い人を育てるのである。次に、本当に大切に、伝承して、発展させて行かなくてはならない研究は、時々の流行や、見かけの派手さとは関係のないものである。しっかりと勉強して、現状以上に理解を深めて行かなくてはならない対象は、思うほど容易には見分けられない。ましてや自明ではない。現状の研究方針、主流と思える方向を深く反省して、本当に大切なことを見極めなくてはならない。さらに、本当に大切な研究は、人を感動させる力があるはずである。感動することもなく「淡々とこなす」研究は、たぶん大切ではないのである。

筆者も初老（還暦を過ぎ）となり、定年まであと6年である。頭が動く時間は、残り少ない。ただ、若い人々に伝えたいことよりも、自分がやりたいことの方が多く、申し訳なく思いながらも、自分の興味にかまけて生きている。言い訳をすれば、現在90歳を超えた、画家の野見山曉治氏の「芸大では絵を描いていた。学生は、私の背中を見て絵描きになってくれるだろう、と思っていた」という言葉だけである。野見山画伯は、そのエッセイ集「四百字のデッサン」などで知られるエッセイストでもあり、私も若い時からの読者で、ファンである。長くフランスで創作活動をして、帰国後は東京藝術大学で教えておられた。哲学者森有正氏との若い頃の交流などを書いたエッセイは、私にいろいろな事を教えてくれた。

私に見せる背中があるのかどうか、わからないが、ともかくやれる間は、自分にとって新しいテーマに挑戦していこうと思っている。若い皆さん、大画家の真似をする、勝手な人間でごめんなさい。